概　要　報　告

実施期日	８月２日(水)
部　会　名	小学校　特別の教科　道徳部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ　『〔親切、思いやり〕って？』～児童の共感、認め合い、共有から見えてきたものを通して～　６年生の実践より

提案概要

学習指導要領〔親切、思いやり〕の５・６年生の内容項目は、「誰に対しても思いやりの心をもち、相手の立場に立って親切にすること。」である。

児童の実態として、学習でも友達との関わりでも意欲的に取り組めることや、友達が頑張っている様子を見て「自分もやってみよう」と感化され、自分の思いを伝えることに意欲を見せる子もいる。一方で、自分の意見を伝えたい気持ちが先行してしまい、友だちの発言に注目できず、隣の友だちとおしゃべりをしてしまうなど、自分のことを優先してしまう様子も見られるため、学校生活をはじめとする様々な日常場面で、自分に関わるたくさんの人への思いに目を向けていくことで、相手の気持ちを理解しようとする意欲を高めたいと考えた。

中心となる教材『最後のおくり物』での実践上の工夫としては、「思いやり」について多面的に捉えさせるような授業展開をおこなった。導入の発問やめあての提示においては、「思いやり」という表現を意図的に使わず、子どもたちから引き出すようにする授業展開を構成した。

もう一つの工夫は、思考の揺さぶりである。同じ登場人物の気持ちを考えるにあたっても視点を変えるような補助発問を入れるとともに、別々の人物の立場から「思いやり」について考えられるようにすることで、〔親切、思いやり〕について多面的に捉えられるようにした。

【成果】

〔親切、思いやり〕の捉え方として、「相手の期待に応えようとする」ことが「思いやりを返す」ことにつながると、新たな視点を持たせた授業展開を工夫した。子ども達から「一生懸命にやることが恩返しすることになる」という意見や、自分の受けた思いやりを返そうと「努力して成長した姿を見せていきたい」という思いが出るなど、教材を自分事として捉えて思考を深めていく姿が見られた。

ねらいを明確化することにより、児童の思考が深まり、親切、思いやりについて自分の思いを表現することにつながったのではないかと考える。

【課題】

授業の最後に書いた振り返りで、「日頃からお世話になっている人に感謝をする」と内容項目にある〔感謝〕の気持ちとなる児童がいた。また「どう期待しているか分からない」と、自分事として捉えることが難しい児童がいた。教材を、より自分事として捉えられるように、「思いに応えるために、これからどんなことをしていったらいいだろう？」といった、より自分の行動について具体的に考えさせる発問やお世話になっていると思う人を具体的に考えることができるような発問をするなど、児童の思考をさらに深められる場面や展開の工夫が必要であると感じた。

質疑応答

Ｑ１　子どもの発言や変化というところでよく学びが深まっていると思った。〔親切・思いやり〕というと、誰に対してもとか、相手の立場に立ってというイメージが強い。今回の報告はＤ領域が混じっている印象を受けたが、それをどうやって「親切」に戻したのか。

Ａ１　今回は、ここが一番難しかった。この教材自体が一体どういうふうに親切と思いやりに関連しているのか考え、すごく悩んだ。授業では子どもたちが自分事として考えられるように、受けている親切や思いやりを、自分はどうやって返していけるのかを考えさせるようにした。

Ｑ２　授業の前半と後半でねらいを分けた意図と、それをどうやって子どもに示したのか。

Ａ２　前半は、教材を通して、子どもたちがどこまで気付くことが出来たのかを確認したかった。後半は、そこから自分はどうしたいと思ったかについて考えたかったので２つに分けた。子どもたちに示したのは、前半は発問で、後半は「相手のために行動できるのは、どんな気持ちがあるからだろう」というところで示したと思う。

Ｑ３　先生の思いがつまった、中学校にもつながる実践だった。授業を踏まえて、子どもたちの普段の生活につなげたことは何かあるか。

Ａ３　授業で意識していることは、子どもの実態をいかに教材に重ね合わせられるかということ、それと自分のことと置き換えて考えやすくすること。その一方で、授業の後に子どもたちにすぐに実践して欲しいと考えているかというとそうではない。すぐに行動にあらわれる子もいるけど、そうでない子もいる。いろいろな子がいる中で、あのとき先生が言っていたのはこういうことかなと考えるきっかけになって欲しいと思っている。

協議の柱及び協議概要

〔協議の柱〕①教材の特性を生かすために、ねらいをどのようにたてるか。
②子どもたちが本音で語りたくなるように「発問」をどのように工夫するか。

〔協議概要〕前半は、各グループに分かれて「最後の贈り物」の教材で、どのようなねらいをたてるか検討した。その際、指導要領解説にある内容項目と概要・指導の観点をあらかじめ示しておいた。参加者は結果を紙に書き、お互いに立ち歩いて見合うようにした。協議の結果に出てきたねらいとしては、「ジョルジュじいさんの最後の贈り物とは何か考えることを通して、思いやりのバトンについて考え、行動に移そうという意欲を育てる」「思いやりの心をもち、相手に接しようとする気持ちを育てる」「受け取った親切や思いやりを周りの人に返していく善さについて考える」などがあがった。

後半は、同じグループで、発問について考えた。

●「人にやさしくした分だけ、自分はどれだけ幸せになれるか」というねらい

発問１「人のために良いことをしたことはありますか。」

発問２「そのとき、どんな気持ちでしたか。」（この後、教材を読む）

発問３　自分が受けた親切がどんどんと次に繋がっていくような発問をしたい。

●「受け取った親切を周りの人に返す尊さについて考える」というねらい

２時間で授業をする。１時間目は教材の内容理解的なこと。ジョルジュじいさんがなぜそのような行動をしたのか、ロベーヌは最後の贈り物を受け取って何を考えたのかについて話し合う。２時間目は親切を自分事として考える。最初は、自分の周りの人（例えば家族・地域の人・下級生）を思い浮かべるようにする。その後で、その人たちにどのような親切を出来るか具体的に考えるという展開。

まとめ概要

提案者は、地域の道徳部会の中で子ども達が主体的に学ぶことや学級やグループの中で共働的に学ぶことについて試行錯誤を重ねてきた。教員がお互いの授業を検討しながら学びを改善していく授業研究が貴重な財産になっている。

気を付けなければならないのは、工夫や改善の意義について十分に理解していないと、学習成果につながらず、活動あって学びなしといった授業に陥ることがある。また、特定の指導方法にこだわると、指導の表面をなぞるだけになってしまい、学びにつながらないという結果になってしまうことがある。

学習指導要領の道徳科の内容項目というのは、ねらいではなく手がかりであり、ねらいとするのは道徳的価値である。今回の提案では内容項目を手掛かりとしてねらいとする道徳的価値に迫っていったものである。

ねらいを達成するには、児童が問題意識をもち、主体的に考えて話し合えるように、児童の発達段階を捉え、ねらいや教材、学習指導の過程に応じて最も適切な指導方法を選択し、工夫していくことが必要となる。